

Title	アリストテレスの質料概念と「裸の基体」説： 『形而上学』Z3,1029 <sup>a</sup> 10-26「抽き去り」が示唆するもの
Sub Title	Aristotle on matter : stripping away in metaphysics Z3, 1029 <sup>a</sup> 10-26
Author	金子, 善彦(Kaneko, Yoshihiko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1993
Jtitle	哲學 No.95 (1993. 7) ,p.39- 57
JaLC DOI	
Abstract	My aim in this paper is to clarify Aristotle's concept of matter, which has been misunderstood, I think, by many scholars. Some commentators insist that Aristotle believes in Prime matter, an ultimate subject with no determinate property in itself. One of the main resources that support such a viewpoint is the passage quoted in the next page. In this quote Aristotle undertakes what scholars metaphorically call "stripping-away", an operation designed to uncover an ultimate subject which underlies all properties of a thing. The uncovered entity is in itself neither something (τι) nor of a certain quantity (ποσόν) nor assigned to any other of the categories by which being is determined. Jan Lukasiewicz even says that this passage is an ancestor of doctrines broadly determined as the bare substratum theory. However it seems to me that such interpretations are incorrect, or at least may lead to a serious misconception of Aristotelian matter. Now agreeing with the recent commentators who deny the fact that prime matter is the main focus of Z3, I am still unsatisfied with the interpretations on this specific passage carried out by them. The reason is that people seems not fully aware of the historical background of Aristotle's argument: ancient materialists held that no matter what changes may occur to things, there must be an underlying subject which persists as the same, determinate entity, that is, a simple, permanent element of all complex, changeable things. I intend to argue that Aristotle presents his own conception of matter by criticizing such materialistic view, which I think is the point of his argument in the given passage.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000095-0039">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000095-0039</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# アリストテレスの質料概念と 「裸の基体」説

——『形而上学』Z3, 1029<sup>a</sup>10-26「抽き去り」が  
示唆するもの——

金 子 善 彦\*

## Aristotle on Matter:

—Stripping Away in *Metaphysics* Z3, 1029<sup>a</sup>10-26—

*Yoshihiko Kaneko*

My aim in this paper is to clarify Aristotle's concept of matter, which has been misunderstood, I think, by many scholars. Some commentators insist that Aristotle believes in *prime matter*, an ultimate subject with no determinate property in itself. One of the main resources that support such a viewpoint is the passage quoted in the next page. In this quote Aristotle undertakes what scholars metaphorically call "stripping-away", an operation designed to uncover an ultimate subject which underlies all properties of a thing. The uncovered entity is in itself neither something ( $\tau\acute{\iota}$ ) nor of a certain quantity ( $\pi\acute{o}\sigma\omicron\nu$ ) nor assigned to any other of the categories by which being is determined. Jan Lukasiewicz even says that this passage is an ancestor of doctrines broadly determined as the *bare substratum* theory. However it seems to me that such interpretations are incorrect, or at least may lead to a serious misconception of Aristotelian matter.

Now agreeing with the recent commentators who deny the fact that prime matter is the main focus of Z3, I am still unsatisfied with the interpretations on this specific passage carried out by them. The reason is that people seems not fully aware of the historical background of Aristotle's argument: ancient

\* 慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程（哲学専攻）

materialists held that no matter what changes may occur to things, there must be an underlying subject which persists as the same, determinate entity, that is, a simple, permanent element of all complex, changeable things. I intend to argue that Aristotle presents his own conception of matter by criticizing such materialistic view, which I think is the point of his argument in the given passage.

### はじめに

アリストテレスの質料概念は、歴史的に見ても、また哲学的な観点からしても非常に興味深いものであるにもかかわらず、しばしば大なり小なりの誤解をもって受けとめられてきた。その極端なケースは、質料を諸性質の背後にあってそれらを支える「裸の基体」として位置付ける見方であろう。最初に、注釈家・研究者たちがそのような理解を正当化するための有力な典拠としてきた『形而上学』Z 巻の一説 (1029<sup>a</sup>10-26) を掲げておく。

10

εἰ

γὰρ μὴ αὕτη οὐσία, τίς ἐστὶν ἄλλη διαφεύγει. περιαιρουμένων γὰρ τῶν ἄλλων οὐ φαίνεται οὐδὲν ὑπομένον. τὰ μὲν γὰρ ἄλλα τῶν σωμάτων πάθη καὶ ποιήματα καὶ δυνάμεις, τὸ δὲ μῆκος καὶ πλάτος καὶ βάθος ποσότητές τινες ἄλλ' 15 οὐκ οὐσίαι (τὸ γὰρ ποσὸν οὐκ οὐσία), ἀλλὰ μᾶλλον ᾧ ὑπάρχει ταῦτα πρῶτῳ, ἐκεῖνό ἐστὶν οὐσία. ἀλλὰ μὴν ἀφαιρουμένου μήκους καὶ πλάτους καὶ βάθους οὐδὲν ὁρῶμεν ὑπολειπόμενον, πλὴν εἴ τί ἐστι τὸ ὀριζόμενον ὑπὸ τούτων, ὥστε τὴν ὕλην ἀνάγκη φαίνεσθαι μόνην οὐσίαν οὕτω σκοπούμενοις. 20 λέγω δ' ὕλην ἢ καθ' αὐτὴν μήτε τί μήτε ποσὸν μήτε ἄλλο μηδὲν λέγεται οἷς ὥριστα τὸ ὄν. ἐστὶ γὰρ τι καθ' οὗ κατηγορεῖται τούτων ἕκαστον, ᾧ τὸ εἶναι ἕτερον καὶ τῶν κατηγοριῶν ἕκαστη (τὰ μὲν γὰρ ἄλλα τῆς οὐσίας κατηγορεῖται, αὕτη δὲ τῆς ὕλης), ὥστε τὸ ἔσχατον καθ' αὐτὸ οὔτε τί οὔτε ποσὸν 25 οὔτε ἄλλο οὐδὲν ἐστὶν. οὐδὲ δὴ αἱ ἀποφάσεις, καὶ γὰρ αὐταὶ ὑπάρξουσι κατὰ συμβεβηκός.

（もし質料が実体でないとすれば、他の何が実体であるかがわからなくなる。というのも、他のものどもが抽き去られた後には、明らかに【質料以外には】何も存続しないからである。なぜなら、一方で (i) それら「他のものども」とは物体の受動様態、能動所産、能力のことだからである。しかし他方では (ii) 長さ、広さ、深さはある種の量であって実体ではない（「どれほど」は実体ではないのだから）。かえって、これらが帰属する第一のもの、これこそが実体である。しかるに、長さ、広さ、深さが抽き去られるなら、我々は、それらによって限定されるものがある以外に何もものも残り存するを見ない。従って、このように考察をする人々には、必然的に質料だけが実体であると思われることになる。

しかし、私が「質料」と言うのは、それ自体としては「何か」とも「どれほど」とも、その他あるものがそれによって規定される何ものとも言われないもののことである。というのも、これらの各々がそれ [x] について述語付けられ、しかも、それ [x] にとってのあり方が、それら範疇諸述語のどれとも異なるような、そうした何か [x] が存在するからである。なぜなら、他ものども [= 範疇諸述語] は実体について述語づけられ、これ [= 実体] は質料について述語づけられるからである。従って、この最後のものはそれ自体としては「何か」でも「どれほど」でもその他何ものでもない。実際、[それらの] 否定でもない。なぜなら、否定は付帶的にそれに帰属するのだから。）

かつて D. ロスは、この箇所ではアリストテレスが試みているのは、物体から諸属性を思考のうちで抽離することにより、肯定的な属性も、否定的な属性も一切含まない裸の質料 (bare matter) を析出する操作であると主張した<sup>(1)</sup>。最近では H. M. ロビンソンが、アリストテレス哲学の中に第一質料の概念があると主張する見解を擁護する過程でこの一節に言及し、そこに「裸の質料」を見出そうとしている<sup>(2)</sup>。問題の小説に着目したのは注釈家だけではない。ウカシェヴィッツは、上の質料規定に見られる「それ自体」(καθ' αὐτήν) という表現に注意を向けて、アリストテレスの「質料それ自体」は、決して知ることのできないものであるという点でカントの「物自体」の祖先であると主張している<sup>(3)</sup>。もしそうであるならば、中世スコラ哲学の「第一質料」(materia prima)、ロックの「質料的実体」(material substance)<sup>(4)</sup>をはじめ、その他類似の概念において、問題の一

節は（アリストテレスの意図如何に係わりなく）「それ自体いかなる性格ももたないもの」「それ自体不可知のもの」という認識に対して歴史的・哲学的責任があることにもなろう。

本稿の目的は、問題の一節をこのような認識状況から救い出すことである。そのためにまず、これまでなされてきたいくつかの解釈を批判的に検討し、それに代わる新しい論点を提出したいと思う。さらにこの作業を通じて、アリストテレスの質料概念に光を当てることにしたい。

## I

通説がアリストテレスに帰してきた「裸の質料」とは、はたしてどのような概念であろうか。そのことをよりよく把握するために、我々はまず、問題の一節に対する伝統的な理解を振り返ってみることにしよう。アリストテレスはここで、物体から諸性質を取り去るという一種の思考実験——それを以後「引き去り」と呼ぶことにする——を試みている。それは二つの段階を経る。まず第一に、物体からその表面的な諸性質を引き去り、次に、最初の段階ではまだ除去されていなかった空間的諸規定（長さ、広さ、深さ）を引き去る。通説の側に有利な証拠があるとしたら、それはこの第二の段階について述べた次の記述である。

しかるに、長さ、広さ、深さを引き去った後には、我々は、それらによって限定されるものがある以外、何ももの残り存するを見ない（1029<sup>a</sup>16-18）

長さ、広さ、深さとは、物体を限定する三つの広がり、三次元の延長である。物体に帰属するこれらの根源的な規定性を取り去ってもなお、規定性を伴った“何か”がさらに残ると想定することは難しい。通説による「裸の質料」とは、このように一種の消去法によって獲得される概念である。

この見方は、引き去りの記述のすぐ後に続く次の言明によってさらに補強されることになる。

私が「質料」と言うのは、それ自体では、「何か」とも「どれほど」とも、その他

あるものがそれによって規定される何ものとも言われぬもののことである (20-21)

多くの注釈家たちは、これが、先に抽き去りによって析出された質料そのものをただちに規定したものとみなした。そればかりかこの言明は、質料概念についてのアリストテレス自身の定義とみなされたために、彼にとっての質料とは、我々がそれを特定するためにいかなる記述にも訴えることのできないもの、あるいは少なくとも、究極的には言表不可能な部分を含むものに他ならないと説かれるようになったのである。

さて、以上のような分析は『形而上学』Z3 の解釈としては一定の説得性をもつようにみえるものの、質料概念とその理解の可能性に対しては大きな損失をもたらすことになる。まず第一に、上述の説明は、質料概念それ自体を矛盾したものにするであろう。しばしば指摘されるように<sup>(5)</sup>、人は質料について「いかなる性格ももたない」と述べることで、すでに一定の性格付けを質料に与えている。すると「質料」は、いかなる性格ももたないと同時に或る性格をもつような矛盾した対象の概念であることになる。

このような困難は、次のような規則を設けることで回避されと言われるかもしれない。すなわち、質料は、それを特定するためにいかなる記述にも訴えることのできないものであるが、このように記述することだけを唯一の例外としてよい。そしてこれが質料概念を特徴付ける必要十分な規定である。しかしながら、この規則なるものにアリストテレス自身に従っていないことは明らかである。我々は、彼にとっての質料が、たとえば「青銅」のように名指し可能な対象であることを至る所で確認することができる。抽き去りの叙述を開始する直前においてさえ、彼は「私が質料と言うのは例えば青銅のことである」(1029<sup>a</sup>4-5) と明言しているほどである<sup>(6)</sup>。

さらに、言明の成立可能性という観点からも疑問が生じる。もし質料が絶対的に不確定なものであるとしたら、我々はいったいどのようにして、

質料を主語としてそれに述語を帰属する言明を形成することができるのだろうか。アリストテレスは同じ Z3 で「他のものがそれについて述語付けられるが、それ自身はもはや他のものについて述語付けられない」(1028<sup>b</sup> 36-37, 1029<sup>a</sup>8-9) という基準を取り上げ、実体の条件としてその是非を検討している（これを以後「基体性条件」と呼ぶことにする）。そもそも質料が実体の候補とみなされること自体、質料がこの基準を満たすと考えられるからである。質料が諸属性の基体であるということは、それが述語付けの主語であることを明らかに想定している。しかしそのことが、質料の絶対的不確定性という考えと両立することを理解するのは難しい。なぜなら、ある述語を主語に帰属するためには、我々は当の主語を「何か」として特定することが可能でなければならないからである。

今述べた論点に加え数々の不合理を余儀なくされる通説に対して、これまでいくつかの代案が提起されてきた。私案を述べる前に、今なお検討に値する M. スコフィールドの見解をとりあげ、批判的な検討を加えておきたい。

スコフィールドはある論文の中で<sup>(7)</sup>性質を抜き去るという操作 (stripping) に着目し、かつて人々が思いもよらなかったような斬新な論点を打ち出した。彼によれば、物から諸性質を抜き去ることでアリストテレスが意図するのは、通常考えられるように“質料を裸の基体として析出・純化すること”ではなく、その逆である。つまり彼によれば、抜き去りの目的はむしろ、諸性質を取り去った後には“何も残らない”ということを示すことにあるというのである。スコフィールドは二つの根拠を挙げている<sup>(1)</sup>。「他のものどもが抜き去られた後には、明らかに何も残らない」(1029<sup>a</sup>11-12)。この文は「質料以外には」を補って読むのがふつうであるが、読者にそのような権利はない<sup>(2)</sup>。さらに彼はこうも述べている。「長さ、広さ、深さが或る物から抜き去られるとき、それでもなお、それらによって規定または確定される何ものかが存在するという想定をどう理解すべきだろう

か、私にはそれを知ることは困難であると思われる」(p. 98).

特に興味を引くのは第二の論点である。抜き去りの手続きにおいて最後に抜き去られる長さ、広さ、深さは限定抜きに語られている以上、ある特定の長さ、ある特定の広さ、ある特定の深さではない。それゆえ、延長を構成する諸次元が、その可能的なあり方まで含めて、悉く除去されるべきである。そうであるなら、そこに残るのはもはや裸の質料でさえあるまい。確かに我々はそこに、絶対的にすべての性質を剝奪された何らかの基体を想像しうるかもしれない。しかし、延長をもちえない物体は実際には存在しないのだから、すべての性質が抜き去られた後には、事実上、何ものも残らない。このような仕方スコフィールドが再構成した抜き去りは、タマネギの構造を知らない者が芯を求めて皮を外側から剥いていくが、最後の一枚を剥いてみるとそこには何もないといった状況に喩えられるかもしれない<sup>(8)</sup>。

抜き去りの結果何も残らないとすれば、もちろん質料も残らない。その結果、スコフィールドは、質料を絶対的な無規定性の脅威から遠ざけることに成功したようにみえるかもしれない<sup>(9)</sup>。しかし、それによって払われた代償はきわめて大きいと思われる。

私がスコフィールドの分析に疑問を抱く第一の理由は、それが Z3 の問題状況にふさわしくない異質の枠組みを導入してしまうという点である。既に述べたように、そもそも Z3 では基体性が問題とされていた。そのような文脈で、何かについて実体としての是非を問いうるのは、基体とそれに帰属する諸性質という枠組み（それを「基体-属性モデル」と呼ぶことにしよう）が採用される場合に限られる。ところが、スコフィールドの理解はこれを無視して別のモデル、おそらくは「性質の束モデル」とでも呼ぶべき枠組みを持ち込むことになると思われる。なぜなら、彼の解釈からは明らかに、事物は諸性質の束以外の何ものでもないということが帰結すると考えられるからである。しかしもしそうであるならば、基体性の観点か



ら実体とは何かを問題にすること自体の正当性が問われることになる。

さらに、事物を諸性質の束と同一視するという考え方そのものについても疑問がある。もし性質が普遍的なものであるならば、諸性質の束もまた同様に普遍的なものであって、およそ物体ではない。諸性質はいったいどのようにして“束”を構成し、物体となるのだろうか。また、それが可能であるとしても、一つの物体を構成するのに、どれくらい多くの、またどんな種類の性質が揃えば必要かつ十分となるのだろうか。もしこれらの疑問に満足のいく説明がないとすれば、我々が諸性質をそこから引き去るはずの当の物体がはたしてあるかどうかさえ明らかではない、ということになる。

事物を諸性質の束と同一視することによって、不可思議な裸の基体を消去しようとする試みは、戦略そのものとしては目新しいものではない。とりわけ英国の経験主義者たちが、「ロック的実体——諸性質を背後で支える不可知の基体」<sup>(10)</sup>への敵意から、その反動として性質の束説、あるいはそれに有利な説を唱えるようになった経緯はよく知られている<sup>(11)</sup>。スコフィールドの解釈を動機付けたのもまた、明らかに裸の基体という亡霊である。伝統的解釈とスコフィールドの対立は、こうしたより大きな文脈の中で捉えることでそのポイントがいっそう明確になると思われる。いずれのケースにおいても支配的なのは、諸性質の背後に裸の基体が存在するのか、それとも事物は諸性質の束以外の何ものでもないのかのいずれかであるという二者択一の立場なのである。

## II

我々は、時代錯誤とも見られる上述の二分法にとらわれることなく、第三の道を追求することにしよう。重要なのは、引き去りと質料という概念が語られる背景的な問題状況を正確に突き止めることである。私は、アリストテレスが直前の Z2 において「実体とは何か」の問いをめぐる様々な

先行思想について語っていることに注目したい。その冒頭で、まず (1) 火、水、土などの自然物体、一般に物体を実体とする見解が述べられ (1028<sup>b</sup>8-11), 次に (2) 面や線や点などの幾何学的対象を実体とする見解が述べられ (<sup>b</sup>16-18), この二つの見解が明確に対置されている (*δοκεῖ μὲν ..., δοκεῖ δὲ ..., <sup>b</sup>8, <sup>b</sup>16*). 私が示唆したいのは、これらの「実体」をめぐる見解の対立が、抽き去りの議論を理解する重要な鍵になるのではないかということである。私の知る限り、このような観点からのアプローチはこれまで全くなされなかったように思う。そこで、以下暫くこの仮説を検討し、最後にそれが Z3 とどのように適合するかを見ることにしたい。

『形而上学』B5 は、そのような思想的対立が比較的明確に現われている箇所として非常に重要である。アリストテレスはそこで一方の説、つまり水、土、火などの単純物体が実体であるとする見解を次のように記述している。

受動様態 (*τὰ πάθη*), 運動, 関係, 配列, 割合は、いかなるものの実体を表わすとも思われない。なぜなら、これらはすべて或る基体について語られるのであり (*καθ' ὑποκειμένου τινός*), またそれらはどれも或るこのもの (*τόδε τι*) ではないからである。最も優れた意味で実体と考えられているものは、複合的物体がそこから構成されているところの水、土、火、空気であるが、熱さ、冷たさ、その他このようなものはこれら [=単純物体] の受動様態であって、実体ではない。むしろ、そのような様態を受容するところのそれら物体のみが、或る存在として、或る実体として存続する (*ὑπομένει*) のである (B5, 1001<sup>b</sup>29-1002<sup>a</sup>4)

彼はここでも、また B5 の他の箇所でも「抽き去り」という言葉は用いていない。しかし Z3 と B5 には、同じ思考のラインが流れていることを示すのに十分な平行性がある。まず第一に、何かを実体として摘出するために基体性条件の適用がなされているという点である。上の箇所で火、水などの単純物体が実体とみなされるのは、それらがまさに基体性条件を満たすからである。また、全く同様の議論は『形而上学』48 にも見られる<sup>(12)</sup>。第二に、語彙使用における共通性である。Z3 と同じ「受動様態」

(πάθη) への言及があるのみならず、上に見られる「運動」は Z3 の「能動所産」(ποιήματα, 1029<sup>a</sup>13)<sup>(13)</sup> に密接に結び付いた言葉である。Z3 においては様態などの「他のものども」を抽き去るとき (質料以外は) 何もその基に存続しない (οὐδὲν ὑπομένον, 1029<sup>a</sup>12) と言われていた。ここでも同じように、そのような諸属性が述語付けられる単純物体のみが、実体としてその基に存続する (ὑπομένει, 1002<sup>a</sup>3) と言われている。

B5 ではそのような単純物体が「質料」として位置付けられているわけではない。だが、他の著作、たとえば『自然学』などの先行思想を論じる箇所に目を転ずるなら、土、水などの単純物体を実体とする見解が、質料を実体とする人々に帰されることは明白である (e. g. *Ph.* B1, 193<sup>a</sup>9-30)。しかもそれらが「それぞれの事物の基体として基に存する第一の質料」(ἡ πρώτη ἐκάστῳ ὑποκειμένη ὕλη, 193<sup>a</sup>29) として位置付けられていることは、今の問題にとってきわめて重要である。「とりわけ第一の基体 (τὸ ὑποκειμένον πρῶτον) が実体であると考えられている」(1029<sup>a</sup>1-2)。この洞察こそが Z3 の議論の出発点であったことを我々は想起すべきである。

通常人々は、まず物体から (i) 様態、能力などの表面的な性質を取り去り、次に (ii) 長さ、広さ、深さという、物体を構成するより根源的な性質を取り去るという二つの段階を考慮した上で、抽き去りはこの二つの段階をとともに経なければ、いかなる意味でも成就されえないということを暗黙の了解としている。しかし、以上の考察から明らかなように、抽き去りの最初のステップ (i) に見られる「受動様態、能動所産、能力」は、究極的には単純物体である質料の属性であり、それゆえそれらを抽き去るときに残されるのもまたそのような質料基体であることになろう。もしそうならば、少なくとも質料主義者にとって、抽き去りはすでに「受動様態、能動所産、能力」が物体から取り去られる段階 (i) で終了していると言うべきであろう。

しかし、そうであるなら、Z3 ではその上なぜ (ii) 「長さ、広さ、深さ」

までもが抽き去られる必要があるのだろうか。ここでもまた、*B5* と *Z3* の平行性がその疑問に答えるための手懸りになるように見える。というのも、*B5* の先の箇所に続いてアリストテレスは、そのような「昔の」質料（物体）主義者（οἱ πρότερον, 1002<sup>a</sup>8）に対抗する論者として、物体/立体（σῶμα）<sup>(14)</sup> よりもむしろ面，線，点，とりわけ数を実体とする「後の人々」（οἱ ὕστεροι, <sup>a</sup>11）の見解に言及しているが、そのことは、*Z3* において「長さ，広さ，深さ」が抽き去られることとの関連性を示唆するように思われるからである<sup>(15)</sup>。さてかの人々の立場にとって、σῶμα 以上に面，線，点が実体と考えられるのは「それらは σῶμα なしにもありうるのに対し，σῶμα はそれらなしにはありえない」（<sup>a</sup>6-8）からである。点は線を，線は面を，面は σῶμα を限定し，σῶμα はそれらすべてによって限定される。それゆえ，面は σῶμα から，線は面から，点は線から，それぞれ独立に離れて存在することが可能である<sup>(16)</sup>。それなら逆に，面を取り去れば σῶμα が，線を取り去れば面が，点を取り去れば線が，その存在を奪われることになる。アリストテレスは，*Z3* で質料主義者をして「もし質料が実体でなければ，他の何が実体であるかがわからなくなる（διαφεύγει, 1029<sup>a</sup>11）」と語らせていた。ここでは反対に数-実体論者をして「もしそれら【幾何学的諸対象】が実体でなければ，何が実体であるかがわからなくなる（διαφεύγει, 1001<sup>b</sup>28, cf. 1002<sup>a</sup>27）」と語らせている<sup>(17)</sup>。

さてここで重要なのは、*B5* のアポリアのもう一方の定立においてアリストテレスが、質料（物体）主義の側からそれら幾何学的対象の実体性を否定する反論である。その批判は第一に（1）数-実体論者たちの「σῶμα はそれら【点，線，面】なしにはありえない」という主張でもって意味される“σῶμα”は、少なくとも感覚的物体ではありえないという点に向けられる（cf. <sup>a</sup>17-18）。それはせいぜい抽象的な対象としての「立体」にすぎないであろう。他方（2）もしそれらが感覚的 σῶμα の内にあるべきだとすれば、それら幾何学的対象と σῶμα との依存関係は逆転し、かえってそれら

は  $\sigma\omega\mu\alpha$  なしには存在しないことになる (cf. <sup>a</sup>18-25). いずれの場合 (1) (2) にも、彼らの言う幾何学的対象が実体ではないことが帰結する. アリストテレスは様々な箇所で、それらは本来的に感覚的物体から離れてありえないと繰り返し主張し、さらにそれらを一種の分量として位置付けている<sup>(18)</sup>.

以上のことが Z3 における抜き去りの議論にどう適合するかを見ることにしよう. 「他のものどもが抜き去られた後には、明らかに [質料以外には] 何も存在しない. なぜなら、それら他のものどもとは物体の ( $\tau\omega\nu$   $\sigma\omega\mu\acute{\alpha}\tau\omega\nu$ ) 受動様態, 能動所産, 能力のことだからである」(<sup>a</sup>11-13). 質料主義者にとっては、まさに質料がそれら「他のものども」を受容する基体であるのだから、それらを抜き去るならば質料以外何も残らない. しかしここで数-実体論者の側から、質料を含めあらゆる  $\sigma\omega\mu\alpha$  を限定する幾何学的諸対象のほうが  $\sigma\omega\mu\alpha$  よりもいっそう実体であり、 $\sigma\omega\mu\alpha$  はそれらなしにはありえないのではないかとの異論が提起されるかもしれない. そこで質料論者は続けて言う. 「しかし長さ, 広さ, 深さはある種の量であって実体ではない (“どれほど” は実体ではないのだから). むしろ、これらが帰属する第一のもの, これが実体である」(<sup>a</sup>14-16). 長さ, 広さ, 深さは、感覚的物体にとって単なる分量にすぎず、実体ではない. 逆に、それらは物体の長さ, 広さ, 深さとしてしか存在しえないのだから、基体こそが実体である. 質料主義者はこう続ける. 「長さ, 広さ, 深さが抜き去られるとき、我々は、それらによって限定されるものがある以外に何ものも残り存するを見ない.」それらを抜き去るならば、まさに基体としての物体だけが残るであろう. なぜなら、実体を抜き去るのならいざ知らず、ここで抜き去られるのは物体の単なる分量にすぎないからには、数-実体論者が主張するように “物体はそれらなしにはありえない” ということにはならないからである. 「従って、このように考察をする人々には、必然的に質料だけが実体であると思われることになる」(<sup>a</sup>18-19). 基体性を基準とする限

り質料実体主義が正当化されることになる。質料主義者の主張「もし質料が実体でないとすれば、他の何が実体であるかがわからなくなる」はここでも貫徹されよう。長さ、広さ、深さは実体ではないのだから、数-実体論者が言うように質料（物体）が実体でないとすれば、他に何が実体であると言うのだろうか。

我々は「抽き去り」の議論にこのような弁証論的ないし問題論的 (aporematic) な性格を認めることができる。質料実体説の勝利に終わるこの小さな対話篇でアリストテレスは、基体性条件が質料を実体とする見解の正当化に役立つということを雄弁に論じている。

## 結 語

以上のような質料主義的立場は、事物の生成・変化という観点から述べることでいっそう明確になろう。その立場によれば、すべての変化は次のような性格をもつ。生成と消滅を含むどのような変化が起ころうと、その全過程を通じて連続的に自らを保つようなものが基体として存在しなければならない。それは何かと問われるなら、人はその究極的な答えとして、他のものに転化しない永遠不変の要素、単純物体の名を与えるべきである<sup>(19)</sup>。もし前節での我々の理解が正しいとすれば、Z3での抽き去りは、あらゆる変化を通じて自らを同じものとして保つ恒常的基体の析出を目的にしたものであるとみなすことができるだろう。物体の能動的・受動的様態、長さ、広さ、深さは限りなく生成し、また消滅する。それゆえ、そのようなものは実体の探求に際して度外視してもよい（あるいは抽き去ってもよい）。しかし、もしそれらの変化に際して何か基体があるべきだとすれば、水そのもの、土そのもの、一般に単純物体がそれである。抽き去りの結果得られるものは、裸の質料であるどころか、あらゆる変化の全過程を通じて同じものであるような、それゆえ或る確定的な性格（同じ水、同じ土 etc.）をもつ基体<sup>(20)</sup>でなければならない。

しかし、アリストテレスの眼目は、まさにこのような説を否定することにあつたと思われる。彼は抽き去りの記述を終えたすぐ後で次のように述べる。

しかし、私が「質料」と言うのは、それ自体としては「何か」とも「どれほど」とも、その他あるものがそれによって規定される何ものとも言われぬもののことである (1029<sup>a</sup>20-21)

質料がそれ自体として「何か」とも「どれほど」ともその他何とも言われぬ理由を、私は G.E.M. アンスコムとともに次のように理解したい。もし或る質料が、それ自体として、つまりその本質上、水であるとしたならば、水が実体的変化（生成・消滅）を受ける場合に、それは（水でない或るものから）水になることも、また水でなくなることもできなかったであろう。まさにこれこそが、質料主義の帰結である。しかし実際は、水は沸騰すれば蒸気（空気）に変化するのだから、質料がそれ自体として水であるのではない。また、もし或る質料がそれ自体として特定性質のもの、たとえば冷たいものであるとしたならば、たとえ水が熱せられても、温くなることはなかったであろう<sup>(21)</sup>。

我々が抽き去りの議論に見出す質料主義とは、質料を絶対化する立場、より正確には質料、とりわけ要素物体をそれだけで独立したものとして扱うような立場であつた。いま述べた生成・変化不成立のパラドクスも、その見地から帰結する不合理の一つであろう。とするなら、そのような立場に対してアリストテレスが対置した自らの質料理解は、質料の非-絶対化、つまり質料がそれ自体で独立したものであることの否定を意図したものとするのが自然ではなかろうか。質料はそれ自体では何とも「語られない」。その理由は、質料が絶対的に不確定なものであるからではなく、逆にそれは常に「何か」(τι) として実体的規定を受けないことには語られえないからである<sup>(22)</sup>。彼が「質料については実体が述語付けられる」(1029<sup>a</sup>23-24) と言うのはそのためである<sup>(23)</sup>。同じ理由で質料はまた、それ自体

では「何か」でも、また「どれほど」でも“ありはしない”。かくして、質料は実体 ( $\tau\epsilon$ ) に依存してのみ語られ、また存在するのだから、事物のあらゆる変化のもとに、それ自体において独立で絶対化された質料実体が、不可変の「何か」として存在すると考えるのは誤りである。アリストテレスの「質料」は、このような先行する自然哲学との対話とその批判を通じて提示された概念であるということ、そしてそのことが質料概念の理解にとって重要な鍵になることを示唆することで、本論の考察を終えることにしたい。

註

- (1) W. D. Ross, *Aristotle's Metaphysics*, Oxford, 1924, Vol. I, Introduction, xciii-xciv.
- (2) H. M. Robinson, Prime Matter in Aristotle, *Phronesis* 19, 1974, pp. 183-187.
- (3) Jan Lukasiewicz, The Principle of Individuation, *Proceedings of the Aristotelian Society*, suppl. vol. 27, 1953, pp. 71-72.
- (4) Cf. John Locke, *An Essay Concerning Human Understanding*, 2.23.2. 岩波文庫『人間知性論』(二) 大槻春彦訳 244 頁。ロックの 'material substance' と『形而上学』Z3 との関連については、註参照。
- (5) Cf. Donald E. Stahl, Stripped Away: Some Contemporary Obscurities Surrounding *Metaphysics* Z3 (1029<sup>a</sup>10-26), *Phronesis* 26 (1981), p. 177.
- (6) この指摘を含め、伝統的解釈の難点については *Notes on Zeta of Aristotle's Metaphysics* (recorded by Burnyeat et al., Oxford, 1979, ad loc.) に詳しい。
- (7) Malcolm Schofield, *Metaph. Z3: Some Suggestions*, *Phronesis* 17, 1972, pp. 97-101.
- (8) この比喻は、Gill (*Aristotle on Substance*, Princeton, 1989, p. 30), 高橋(「アリストテレスの「第一質料」論——質料論序説——」, 『哲学』第 37 巻, 1987, pp. 123-4) から採った。
- (9) 彼の基本的な戦略は、引き去りが質料を純化・析出することに何ら積極的な役割を演じていないとすることで、引き去りの結果得られるものと質料とを別扱いにするというものである。「もし質料が実体でないとすれば、他の何



が実体であるかがわからなくなる」(1029<sup>a</sup>10-11) と言われているのだから、ここで実体の候補として議論の俎上に登るのは、「質料」と「それ以外のもの」という二つのオプションだけである。そこでスコフィールドのアリストテレスは、抽き去りによって「それ以外のもの」を消去することで、質料のみが実体であるという見解の定式化に成功する。

- (10) R. Sorabji は、抽き去りの伝統的解釈と、ロックが質料的実体の概念を導入する際の説明が、きわめて類似したものであることを指摘し、両者の関連性を詳しく論じている (*Analyses of Matter, Ancient and Modern. Proceedings of the Aristotelian Society* 86, 1985-6, pp. 49-65). 先に見た通説を次のロックの記述と比較していただきたい。「もし誰かが、色や重さが内属する基体は何かと問われたなら、彼は、固さの延長した部分という他は何も言うことがなかっただろう。また、もし彼が、固さと延長とが内属するものは何かと問われたなら、彼は、前に触れたインド人よりもそれほど有利な状態にはないだろう。そのインド人は、世界が大きな象によって支えられていると言ったときに、その象は何の上に立っているのかと尋ねられた。それに対する彼の答えは「大きな亀」だった。ところが、この背中の広い亀を支えているものが何かを知るようさらにせがまれて、何であるかわからない何ものかと答えたのである」(*An Essay Concerning Human Understanding*, 2.23.2.)
- (11) 例えば B. Russell がその典型である。Cf. *An Inquiry into Meaning and Truth*, Allen and Unwin, 1940, Chapter VI; *Human Knowledge, Its Scope and Limits*, Allen and Unwin, 1948, pp. 310-325. 彼は、自分が事物を諸性質の束と同一視するのは、それによって不可知の基本を除去することができるからだと言明している。
- (12) Cf. 1017<sup>b</sup>10-14 「単純物体、たとえば土、火、水、その他そのようなものが、また一般に物体が (・・・) 実体と言われる。それらがすべて実体と言われるのは、それらは基体について述語付けられず、かえってそれらについて他のものどもが述語付けられるからである」。Cf. 1017<sup>b</sup>23-24.
- (13) *Ph. Γ*3, 202<sup>a</sup>24 では *ποίημα* が「能動態」を、*πάθος* は「受動態」を意味している。また「能力」(*Z*3, 1029<sup>a</sup>13) についても同様の類似性が見られる。「彼ら「質料主義者たち」は、それ [火、土、空気、水のどれか一つ]、またはそれらが、実体のすべてであり、その他のものどもはみな、それらの受動様態 (*πάθη*)、性状 (*εἴδη*) および配置 (*διαθέσεις*) であると主張する」(*Ph. B*1, 193<sup>a</sup>24-26)。「能力」と「性状」の類縁関係については、*Index Aristotelicus* (Bonitz, 1870), pp. 206-208, pp. 260-261 を参照のこと。これらの言葉はみ

な、抽き去りにおいて生成・変化が問題になっていることを暗示している。

- (14) ここからの議論は、物理的対象としての「物体」と幾何学的対象としての「立体」をあえて区別しない人々の立場に立って展開されるので、その両義性を保存するために以下では暫く原語 ( $\sigma\omega\mu\alpha$ ) を用いて表記することにした。
- (15) この節のはじめで述べたように、面、線、点を実体とする人々については、抽き去りの議論が開始されるすぐ前の Z2 でも言及されていた。Patzig & Frede は Z3 の注釈において「長さ、広さ、深さ」への言及が、B5, 1001<sup>b</sup>26 ff. と Z2, 1028<sup>b</sup>16 に見られるプラトン主義者の理論を示唆するものであるというポイントを提出している。私は彼らの意見の中で、Z3 を Z2 および B5 と関連づける点には同意するが、それらの章に見られる見解を限定抜きにプラトン主義のものとする点は問題があろう。なぜなら、Ross が指摘するように (*ibid.*, vol. I, p. 248, vol. II, p. 162), Z2 では「点、線、面」を実体とする見解 (1028<sup>b</sup>19-21) がプラトンの見解から区別されているからである。点、線、面を実体とする見解はおそらく、ピタゴラス学派か、プラトン主義に影響されたその一派に帰されるものであろう。

しかし、「長さ、広さ、深さ」と「線、面、 $\sigma\omega\mu\alpha$ 」との用法の違いを根拠に、自らの解釈の正当性を主張するスコフィールドのような論者もいる。つまり彼によれば、前者は限定抜きに、物体の延長を構成する次元 (dimension) を意味するのに対し、後者は物の特定の分量 (或る特定の長さ、或る特定の広さ、など) を意味する、抽き去りにおいて問題になるのは前者であって後者ではないのだから、「長さ、広さ、深さ」を抽き去るとき後には何も残らない、というのである。確かにそのような用法の違いを支持するテキストもある。しかし、両者がまったく互換的に用いられる用例がそれと同程度に多いのも事実であり、結局テキストの諸用例を見てわかることは、そのような区別を一義的に強いるはっきりとした決め手はないということにすぎない。むしろ最近では、抽き去りにおいて特定の長さ、特定の広さが問題になるとする見方が有力であり、私自身も B5 との関連からその見方に傾いている。Cf. Sorabji, *ibid.*, p. 52; R. M. Dancy, On Some of Aristotle's Second Thoughts about Substance, *Philosophical Review* 87, 1978, pp. 394-398; F. A. Lewis, *Substance and Predication in Aristotle*, Cambridge, 1991, pp. 290-1.

- (16) 点、線、面が実体として「離れてある」と考える思想については、K2, 1060<sup>b</sup>12-17, N3, 1090<sup>b</sup>5-13 を参照のこと。もちろんアリストテレスはそれらの箇所、幾何学的対象の離存性を否定している。

- (17) ここには、点、線、面は  $\sigma\acute{\omega}\mu\alpha$  に対してあり方（本性）において先立つような実体であるのだから、もし点、線、面が実体でないとしたら、他に実体の候補がなくなってしまう、従ってそれらは実体であるという一種の帰謬的推論が働いている。Z3 でも同様の論法が、今度は質料に適用されていることに注意されたい。なお、「本性および実体における先行性」については、*Met.* 411, 1019<sup>a</sup>2-4「 $X$ は他のものども（ $Y$ ）なしにも存在しうるけれども、 $Y$ は $X$ なしには存在しえないとき、 $X$ は自然および実体において $Y$ に先立つ」という定式を参照。
- (18) Cf. 413, 1020<sup>a</sup>7-14.
- (19) Cf. *Physica*, B1, 193<sup>a</sup>9-28. なお、p. 48 の説明も参照のこと。
- (20) 先に見た *Met.* B5, 1001<sup>b</sup>29 ff. でもまた、質料主義にとって様態、配置などの基体が或るこれ ( $\tau\acute{o}\delta\epsilon\ \tau\iota$ ) であることが示されていた。p. 47 の引用を参照のこと。
- (21) Cf. G. E. M. Anscombe & P. T. Geach, *Three Philosophers*, Oxford, 1973, p. 47. 彼女はさらに、「[質料はそれ自体として] 否定ですらない」(1029<sup>a</sup>25) に対して同様の論点を加えている。すなわち、もし或る質料がそれ自体として非-水であるとしたら、それが実体的変化を受ける場合に、それは（非-水から）水になることができなかったであろう。いずれの場合も、アンスコム指摘はきわめて説得的であると私には思われる。
- (22) 質料がそれ自体として何とも語られないことが、絶対的不確定性を含意しないことについては、牛田（『アリストテレス哲学の研究』創文社、1991, pp. 82-84）、アンスコム (*ibid.*, p. 47-54) を参照のこと。質料には、特定の本質（ $X$ ）であることも、またそれが欠如した状態（non- $X$ ）もともに受け入れるといった受容可能性以外のどんな特徴もない。それゆえ、それにはいかなる不可能性もない。上掲の文献では、そうした質料の可能態としての性格がアリストテレスの実体論、生成論で演じる役割について詳細に論じられている。
- (23) 質料について実体（形相）が述語付けられるという特異なタイプの述語付けが『形而上学』の中心諸巻で重要な機能を果たすことは、近年、多くの人々が指摘するところであり、そのような観点からテキストを解釈しようとする試みが一つの潮流にもなっている。本論では詳しく扱えなかったこの重要な論点については次の文献を参照されたい。J. Brunschwig, *La forme predicat de la matiere ?*, in *Études sur la Métaphysique d'Aristote*, ed. by P. Aubenque, Paris, 1979, pp. 131-166; John A. Driscoll, EIAH in Aristotle's earlier and later Theories of Substance, in *Studies in Aristotle*,

pp. 129–159, ed. by D. J. O'Meara, University of America Press, 1981;  
F. A. Lewis, *Substance and Predication in Aristotle*, Cambridge, 1991;  
Michael J. Loux, *Primary OUSIA*, An Essay on Aristotle's *Metaphysics*  
Z and H, Cornell University Press, 1991. 私自身も昨年末 (1992 年 12  
月 23 日), Z3 における基体性条件とそのようなタイプの述語付けとの関連  
を主題的に扱った小論を発表する機会に恵まれた (ギリシア哲学研究会).  
そのときいただいた多くのコメントが, 今回の論文の作成に際して大きな助  
けとなった. この小論において, そのときの質疑応答で筆者が十分に答えら  
れなかった点を, いくらか明確にすることができたのではないかと思う.